

イサザ資源の現況把握調査結果（2021年）

大前信輔

1. 目的

イサザは、琵琶湖漁業の重要な漁獲対象魚種であると同時に、資源量が大きく増減することが知られている。このため各生活史段階において、資源状態を評価することを目的として調査を行った。

2. 方法

3月上旬から8月上旬にかけて、水産試験場船溜まりでの籠網による親魚調査、海津大崎地先での多層曳き網による浮遊仔魚調査、および彦根・長浜地先での小型沖曳き網による稚魚調査を実施した。

3. 結果

親魚調査

3月1日から6月7日にかけて約1週間ごとに実施した。3月29日に最大値（55.2尾/籠/日）を示した後に減少し、5月10日以降は0尾/籠/日となった。各年の最大採捕数を比較すると、2021年は2009～2013年および2017年に次いで少ない採捕数であった（図1）。

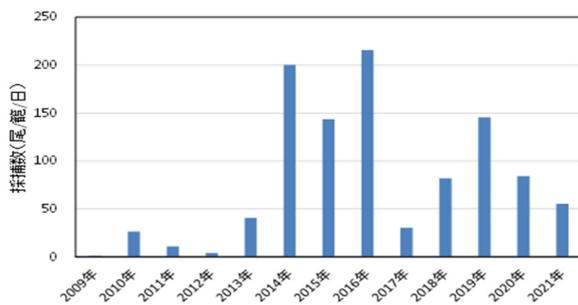


図1 各年の親魚最大採捕数の推移

当年エリ CPUE およびイサザの主要産卵場である海津での産卵量との間に相関が認められる4月平均値は3.6尾/籠/日であり、2013年以降で最小値となり、2009年～2012

年の水準となった（図2）。

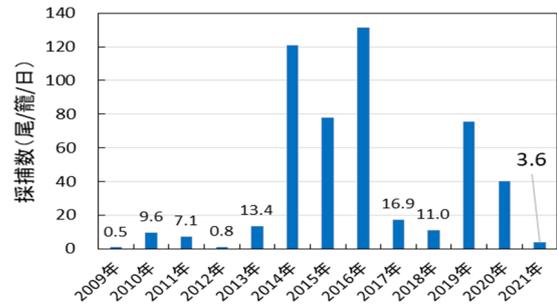


図2 4月の親魚採捕数の推移

浮遊仔魚調査

沿岸から0.2kmと2km離れた地点で6月1日に実施した。多層曳き網の曳網速度は約1.5ノット、曳網時間は10分、曳網深度は11m～18mとした。その結果、6尾/網/hr採捕され、6月上旬の過去平均値（2015年除く2012年～2020年）の23.4尾/網/hrを下回った。

稚魚調査

水深20m地点で7月6日と7月28日に実施したところ、採捕数は20.6尾/曳網であった。過去平均値（2013年～2020年）は125.3尾/曳網であり、前年からは増加したものの引き続き低い水準であった（図3）。

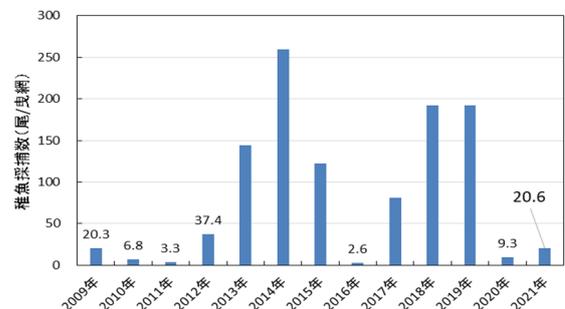


図3 稚魚採捕数の推移

2021年は総じて低水準であり、親魚数が特に少なかったためと考えられた。